

【非賣品】

名古屋市中區新榮町三丁目
名古屋電氣學校
發行所

名古屋電氣學校

名古屋市中區新榮町三丁目（電話東一七番）

夜間部新學年開始

十月八日入學式

校報

昭和八年
九月號

卷尾に同窓會欄あり

回 顧

校報前號(三月)發行以後の校内行事を顧るぞ

四月八日 晝間部豫科一年生の入學式午前十時より舉行
尙本年度は高等科を復活。入學者十名あり。

四月二十九日 天長節、十時より拜賀式舉行

四月三十日 覺王山日暹寺にて本校職員卒業生在校生中の先
没諸靈追弔法會を執り行ひ遺族在校生參列

五月一日 第三師團招魂祭

五月二十日 驛傳競走舉行、本校午前八時半出發昨年の道筋
を逆に聚樂園目ざして進む、決勝順位は別項の
如し

六月一日 晝間部本科生百余名は江ノ島、鎌倉、東京、日
光、長野の長途修學旅行に出發

六月六日 晝間部一年二年生合同にて惠那峽大井ダム發電
所見學の遠足を行ふ

この日本科生も歸名

六月二十一日 熱田祭

六月二十七日 東區若水町に新設の本校運動場にて校内選手權
大會第一日(野球、角力、陸上競技)を行ふ

六月二十八日 校内に於て第二日(劍道、卓球)を行ふ

六月二十九日 辯論大會、音楽部演奏會を行ふ、午後一時各學
年總得点發表賞杯授與式を舉行す、各學年各種
目についての得点は次表の如し。

| | 驛傳 | 野球 | 卓球 | 劍道 | 角力 | 辯論 | 陸上 | 計 |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 本科 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 5 | 3 | 33 |
| 二甲 | 3 | 1 | 3 | 0 | 2 | 4 | 2 | 15 |
| 二乙 | 7 | 2 | 2 | 3 | 0 | 2 | 1 | 17 |
| 一甲 | 0 | 3 | 0 | 1 | 3 | 3 | 5 | 15 |
| 一乙 | 1 | 0 | 1 | 2 | 1 | 1 | 0 | 6 |

七月二十日 暑 中 休 暇

八月十日 本日より晝夜間ともに授業開始

八月十一日 秋季皇靈祭。午前十時より夜間部本科生の卒業式

を舉行する豫定。

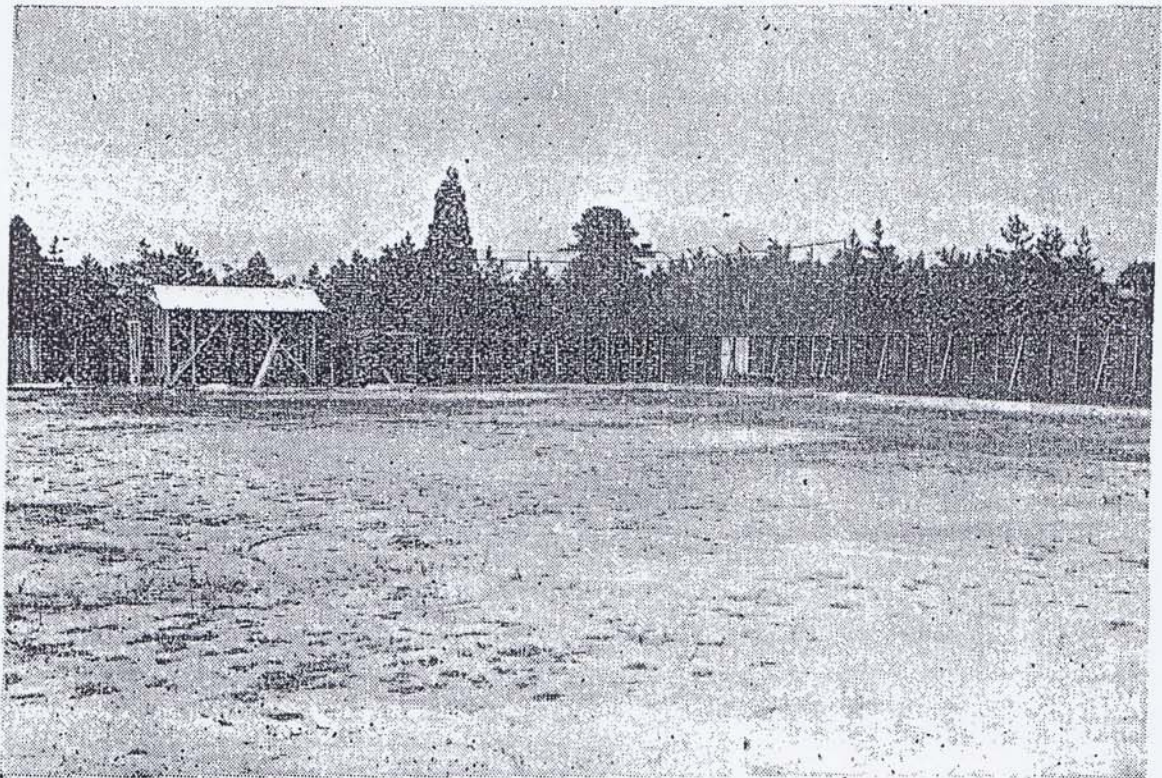
野 球 部

岩 井 廣 一

我等の野球場が欲しい!!これは我々部員の久しく熱望する處であつた。處がこの多年の宿望が叶つて、今度東郊若水町内に運動場が購入され、其大半が野球練習場にふりあてられた。これで空地漁りのルンペン野球も清算されて、一躍堂々たる學校野球部の態形を添へた、一同の歡喜はたさへやうもない、今や部員一同感謝と希望に燃え日々孜々と練習に怠りない。

× × ×

回顧すれば誠に感愾無量である。市立第一高女跡でクラスリーグ試合を始めたのは二年前で、これが導火線となつて野球部なるものが生れ、こゝを追はれて今池の廣場に移つた頃からやゝ正式に練習をしはじめた。然し空地の無斷借用であるから満足な練習の出来る筈はない、場所を先きに取りれたら其の日の練習は駄目になる、通行人は遠慮なく球場を横切つて行く、蜻蛉つりの小供の一隊、爪上げの大人の一團、こゝ言つた連中に日に二三度は必ず邪魔をされる、それ位のこゝならまたよい、スピードのかつたあの硬い球が無心に遊ぶ小供にあつたさき、人家のガラスを破壊したさき、背負つて行く爪を打ち抜いた時、全身の冷汗が一齊に下る、花園には入した球を拾ひに行けば其處の親爺に大喝される、實に安らかな日さてはなかつた、この精神的の打撃だけでも野球部員は憂鬱にならざるを得なかつた。これに引きかへ今日此頃は、何と氣持ちよきのびくさ練習出来るこゝよ、この幸福な味はずに去つた先輩諸君に、出来るならこの幸福が分けてやり度



い。

X X X

新入部員本科吉田、二乙田村伊藤鈴雄、一甲森田牛田大村、一乙大平久芳平井沖田、特に優れたものがないが皆未知数だ、然し昨年よりは充實したチームになるであらう、統制ある練習と燃える様な部員の意気さは必ずやこれを實現さすであらう。

第三回校内選手権大會野球戦

一日で順位を決めなければならぬ、日は永いとは言へ規定の七回戦では刊底終り切らない、で五回勝負とし、一年甲乙の勝者と二年甲乙の勝者と本科の三者でリーグ戦を行ふことにした。

一甲對一乙(先)

一乙チームを見てゐる少年野球の如き感がある、投手町田は丈も高くガツチリした處があり、これを救くるに小つぶではあるが捕手大平、打撃のきく八木一壘手、こゝらが中堅で一甲にぶつかつて行つたが、投手縦山の直曲を交へた好投にノーヒット、出塁したのは僅かに二回、勿論零敗した、然し案外よく守つた、一甲の揃つた内野陣に少しも遜色のない位よく守つたのは大手柄と云はればなるまい。

| | |
|-------|-------|
| 〔一乙〕 | 〔一甲〕 |
| (遊)平井 | (捕)森田 |
| (左)白井 | (一)牛田 |
| (捕)大平 | (投)縦山 |
| (一)八木 | (遊)水谷 |
| (二)久芳 | (二)木下 |
| (投)町田 | (三)大平 |
| (右)淺野 | (中)大津 |
| (中)中村 | (右)金 |
| (三)松岡 | (左)大村 |

| | | |
|----------------|--|-----|
| 一乙 0 0 0 0 0 0 | | 0 |
| 一甲 1 0 0 0 0 0 | | 1 A |

二甲(先)對二乙

二甲は伊藤を筆頭にナインの技術にむらがなく、チームワークさへされてをれば可成り威力あるチームであるが、速球投手奥田を擁する二乙は、奥田のコンデイションさへよければ俗に之れに對等して行けるだらう。果して奥田の調子非常によく、僅かに敵に一点を與へたのみで攻撃に於てもよくチャンスをつかみ、竹中投手の肩のみたれに乗じて一擧六点を獲得して大敵二甲をほうむり去つた。二甲は竹中投手を重要しすぎて、ピンチに際してこれを交替せしめなかつたのは大なる誤りであつた。尤も竹中に代るべき投手のなかつたからでもあらうが伊藤をリリーフに立てればこれを防ぎ得たであらうと思はれる。

〔二甲〕

| | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| (投)竹中 | (一)河井 | (捕)伊藤 | (遊)木下 | (左)濱田 | (中)寺本 | (二)野村 | (右)左橋 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|

〔二乙〕

| | | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| (遊)塚本 | (二)生木 | (三)田村 | (投)奥田 | (一)三谷 | (捕)眞野 | (中)松本 | (左)鈴木 | (右)伊藤 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|

本科對一甲(先)

| | | |
|--------------|--|-----|
| 二甲 1 0 0 0 0 | | 1 |
| 二乙 0 6 2 0 | | 8 A |

シートノックを見てゐても流石本科だと云ふ感じはするが實際すごい處は岡田、桑田、兼岩位で二乙に敗れたりとは言へ二甲の技倆を以てすれば或は之れを破り得たかも知れない、まして勝負は時の運であるに於てをや。さて一甲であるが桑田のカーブに、さぞ三振續出だらうと思はれたが割合によく打つた、但し總て凡ゴロに終つて得点にまでは至らなかつた。もう一つ案外なことには縦山の球位は散々打ちまくるたらうと期待したが、これが大外れ

却つて縦山に惱された貌だつた。三回裏二本の四球の後、兼岩ヒツトで出て満塁のとき、岡田のレフトを抜く三壘打でランナー一掃、此處で六点の大量得点し勝負を決した。

兼岩 田藤 江田 藤
 兼林 岡桑 安秋 吉松 佐
 (遊) (捕) (一) (二) (右) (中) (左)

一甲 000000
 本科 06000A
 6A0

本科(先)對二乙

猛烈な驟雨が一過して、砂煙りのグラウンドは絶好のコンディションとなつて最後の試合を迎へた、奥田は對二甲戦に全エネルギーを使つて了つて、もう己に戦意さへ欠いてゐた、奥田一人を頼りに戦つて來た二乙軍、かくなる上は優勝の意氣に燃へた本科軍に敵す可くもなく、本科軍の痛烈なる總攻撃にたまりもなく潰滅して、豫想はたかはず本科斷然優勝す。

本科 00622
 二乙 00000
 010

優勝者決した後には二三等及四五等の決定にかゝり各部の競技終る頃には終了した。順位本科、一甲、二乙、二甲、一乙

卓 球 部

第三回中部日本學生卓球優勝大會中等學校部

昨年にも増して充實したチームを有する本校卓球部の優勝は自他共に許す所ではあつたが、地本に例年の男、第一師範、名古屋中

學をひかへ、遠く東海の地より静岡中學の遠征もあり、昨年全國大會にて決勝で我をして無念敗憐のうちみを喫せしめた宿敵奈良商業が出場するやも知れずその報も傳はり我等は試合前の練習に萬全を期する爲六月十四日頃より後藤先生の御宅に合宿し後藤先生の指導の下に統制ある練習生活に遣入つた。總員は十三名、練習は本校獨得の猛烈さで、而も規則正しく行はれた。此の練習の結果、体力に氣力に技術に一段の凄味を加へ、元氣潑潑、左の陣容にて我等は當日の試合にのぞんだ。

A組 中野芳兼(本科)

伊藤俊夫(二年)

横江一夫(高等科)

古瀬元太郎(高等科)

小川秀夫(夜一年)

B組 羽根勇(本科)

田村正記(二年)

太田茂(本科)

伊藤鈴雄(二年)

秋江榮吉(本科)

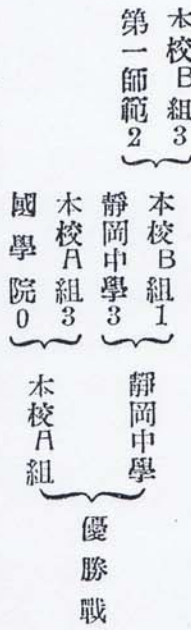
A組は飽くまで打法確實、其粘り強さを誇る中野を先鋒とし、二番の伊藤は体力の旺盛斷然他を壓し、まともに打つては横井、古瀬、中野と譬も容易には勝を得がたいと思はれる者、中堅にあるは知る人ぞ知る中京學生卓球界の第一人者本校卓球部主將の横江四番は今年來技に於いて長足の進歩をなし、俊敏な動作にまつて其のあたり凄き古瀬、ラストは實業團体に育つて試合なれにして居る小川、此の五人のメンバー、此の充實したチームを以てすれ

ば我等何をかおそれんである。

B組は昨年の木大會の殊勲者太田を主將として元氣一杯新進氣鋭の戦士達の集りである。我が校の隆盛におそれをなしたか、豫想に反して出場校は少なかつた。奈良商榮來らず、名古屋中學出場せず、桑名中學も個人に二名出場したのみ、其の間にあつて本校はA B二組を出し、多數の應援團さまつて場内を獨占したかの感があつた。

試合は個人トーナメントに初まり、其の二回戦を終つて、団体對抗にうつつた。

一回戦 二回戦

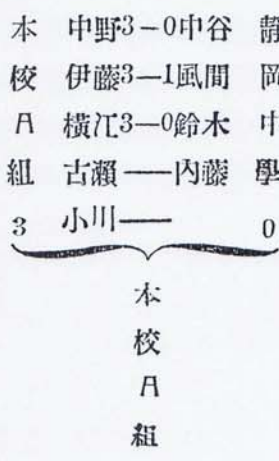


本校B組は劈頭一師と組み大熱戦、太田よく彼の主將を倒し得て勝利は我が物となつた。次いで遠來の静岡中學とあたり、屢々敵を危地におとし入れたが彼までも流石は東海の雄、我遂に及ばず敗退の己むなきに至つた、さは云へ、その熾烈な闘争力は敵の心膽を充分寒からしめた事と信ずる。國學院は到底我がA組に敵す可くもなくワンセットをも得ずに退いて、愈々優勝戦は本校A組と静中との取合せとなつた。

次いで個人トーナメントが第三回戦より行なはれ、火花を散らす接戦につぐ接戦の後準優勝戦に残るもの本校の中野、古瀬、横江の三強豪に一師の恒川の四名。古瀬、軽く恒川をほふり、横江は中野との同志打に此れを倒し本校の優勝は確實となつた。



横江、古瀬の闘ひは正に技倆伯仲、彼に圓熟せる試合上手さがあれば我に敵の虚を突く敏速さあり、ロングにショウトにカットに我々をして手に汗握らせる模範試合であつた。大接戦の後勝運遂に古瀬に幸ひし木大會に一度優勝した横江は其の榮譽を友にゆづつた。静中と本校A組との優勝戦



彼も善戦よくつとめたが、本校A組の余裕綽々たるに敵すべくもなく、右の様な優秀な戦蹟で本校は此の大會に再び覇業をなす事が出来た。豫期して居た事ははいへ二年連勝の榮を得て、應援團の榮ある歡呼の中に選手一同顔見合はせて聲もなく、感慨に胸をふるはせた。此の光榮、此の光榮永久に我が頭上にあれ!

〔附記〕 かく我が部が優秀な成績を得たは、部員一同の勞苦はさることながら、後藤先生のよき御指導と外諸先生、校友諸兄の熱誠なる御後援のためものと深く感謝する次第であります。尙我が部は今年の秋こそ、全國制覇の偉業を成し遂げたいと切望して居る事とて一層の御鞭達の程御願致します。

剣道部

甲 木

先輩諸兄の努力に依り漸く建設階程を終へた後を引き承け一同未
 た技、甚だ遜色あるを免れぬも、吾々若人の熱と意氣で吾々の手
 で剣道部の充實を全うし、責任を充分果さうと日々規律正しく練
 習をなしつつあり。

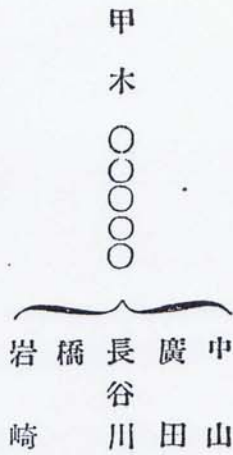
次に去る六月二十八日午前八時より第三回校内剣道大會開催さる
 成績左の如し。

審判 後藤先生、中島先生

○部員互格試合



○五人掛

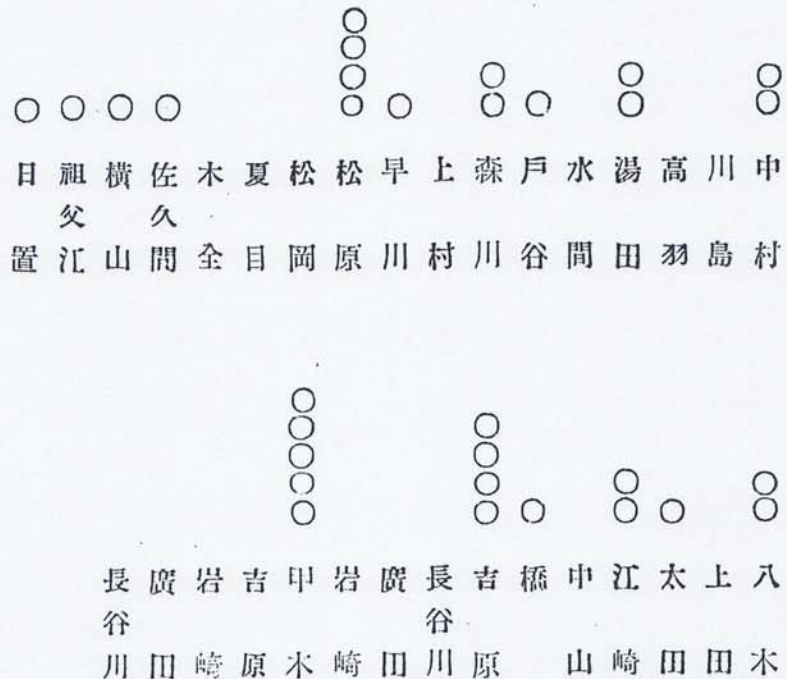


| | | | |
|-----|-----|-----|-----|
| 順位 | 第一等 | 第二等 | 第三等 |
| ○輪轉 | 甲木 | 吉原 | 松原 |
| 第四等 | 江崎 | 八木 | |

○級對抗試合

成績左の得点表の如く第一等は豫想通り本科であつた

| | |
|-----|----|
| 第一等 | 本科 |
| 第二等 | 二 |
| 第三等 | 一乙 |
| 第四等 | 一甲 |
| 第五等 | 二甲 |



角 力 部

熊 森
崎 田

| × | 本科 | 二甲 | 二乙 | 一甲 | 一乙 | 合計点 |
|----|----|----|----|----|----|-----|
| 本科 | × | 6 | 6 | 10 | 8 | 30 |
| 二甲 | 2 | × | 5 | 5 | 5 | 17 |
| 二乙 | 5 | 8 | × | 7 | 5 | 25 |
| 一甲 | 0 | 7 | 4 | × | 7 | 18 |
| 一乙 | 5 | 7 | 6 | 5 | × | 23 |

五月本校運動場が東郊若水ヶ丘の一角に設置せられるや、我等角力同好者十數名相寄つて此處に始めて角力部を設立した。人は少くとも、業は拙なりとも、我等は角力部創造のパイオニヤーとしての自信を持つて、練習に邁進するを誓つた。

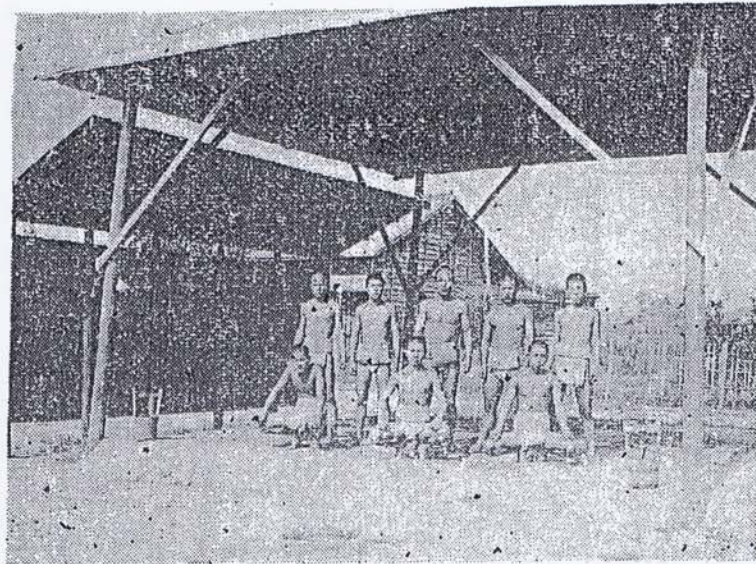
六月十日、正式に後藤先生をわづらはして部長になつて頂く。

七月二日、部長の御盡力により、一中、明倫、一師等の師範として名譽高き福知山氏(本名寺岡氏)を本校師範として招聘す。

七月五日、師範の指導により土儀を築く。本日の模様は學校映畫

部により七月ニュースとして撮影せらる。

七月六日、本日より愈々木式の練習を開始する。時期は將に七月の最中、焼けつくような炎熱の日續づく土用前の午後半日を、いたいたしい迄のカスリ傷や打傷に、汗と血をにじませて疲労にあ



て、日、一日と練習に拍車をかけて居ます。

請ふ、諸君よ。期せられよ、我等角力部、今秋初陣の成績を!!
かく迄我等は斷言して擲筆する。

部員(選手候補)

えきながらの猛練習も、師範の超人的努力による指導さ、行く所迄行かんかなの氣勢を示される部長のつきりの激励さによつて、いやが上にも奮ひ超されるのは、熱、亦熱です。練習、練習、何かも唯々頭にあるのは、練習のみでした。かくして我等は創造より、制覇へこの、物すごいピッチをあげ

本科 熊崎、森田、山田、石山、荒木、鈴木
 二年 竹中、稻垣
 一年 松岡、蛙川、伊井
 (昭和八年八月一七日)

陸上競技部

濱田 生

運動場の出現と共に私達のグループは角力部と共に新しく諸君の前にデビューしました。

さるける様な六月の陽光を身に浴びてスタートの號砲はひびく。スポーツシーズンは將に酣である。私達は晴々澄み上つた初夏の天空をあほいで自由なさびまはれる、トラックフィールドを得々さ、得意のスプリントに一日の練習を忘たりませんでした。木々の緑一ほの濃さがまして、蟬がなき、流汗漂瀉の七月の初私達へ以前東邦商業で名スプリンターとして鳴らされた林さんがコーチに来て下さる様になりましたので、一同大に意氣をあげて練習も以前に勝さつて、知らずくエキサイトされて熱心になつて参りました。いづれ私達は初めてではありますけれど、此の秋にはいづれかの大會に出場してレコードを競はんと期して居ます
 (一九三三・八・二〇)

庭球部

部長 江本 巴

七月末より部員一同の努力奉仕により運動場の一部の地ならし土盛りを行ひ、庭球コート在完成練習を開始した。

目下部員三十二名主將木和田正憲統率の下に毎日授業後練習を行

つてゐる。但し開設以來日尙淺き爲め技術の進歩は分らない。吾等部員一同は技術を磨き身体をれると同時に運動精神の涵養に努力してゐる。

第五回文藝大會の記

— 辯論部 —

M・N 生

六月廿九日、午九時より、第五回文藝大會は催された。和田先生の開會の辭に始まり、別項プログラムの順序によつて音楽部と辯論部と共に盛大に行はれたのであつた。その概況を述べよう。

先づ、馬場要君は、やをら壇上に立つて、明快に「信念」の人生に必要なことを論じ、中村久夫君は、熱心に「愛國心」を強調する。矢具島魁男君は「立志を説き志は須く高大なれ」と青少年に對して叱咤する。嚴肅そのもの、如き峰野榮君は三河男子を代表する好顔の青年、壇上に屹立して大聲一番「裸一貫」の眞面目を説破し、男子須らく眞の實力を養つて獨立直往し、勇敢に生きざるべからずと熱辯を揮ふ。安孫子廣一君は五尺にみたぬ少年辯士流暢に、「努力」を説いた。許万性君は、諄々「孝は思想にあらず、人間自然に有する本來の道」である。万性の基なるを論ずる。中山忠止君は、「何事も眞劍にすゝめ」と如何にも眞劍な態度で之を強調した。成瀬四郎君は、日本の現狀を憂ふる慷慨の辯士か。「皇道精神を説き、吾人の使命」について吾々に訴へるところ、さながら荒木陸相の雄辯を想はしめるものがあつた。堤正美君は「本分を守れ」と生徒らしい論題を以て眞面目に説く。伊藤鉦一君はペートウベン一生の努力生活を述べて、永久の生命を得よと痛論

する。後藤種一郎君は梢ユーモアを交へて一分一秒の時間も大切にせよと唱へる。本科の鈴木義和君は、東濃の山間に在りて常に自然を友とする學生にふさはしい題「大自然を友とせよ」と自己の主張を強調した。佐野春雄君は、平然として淡々、「機會」は捕へ難く逃げ易い、されど、機會は之を捕へんとする者に到來する旨を明快に説く。雄辯家の定評高い矢野君は、「勇氣」なる演題を掲げて登壇、凜然たる態度と井然たる論旨によつて滿堂の聴衆を謹聴せしめた。最後の水野忠雄君は、荒木陸相の講話よりうけた感湧を以て吾々の眼前に屹立し滔々懸河の辯をふるつた。慷慨悲憤の士を想はせる激越の調、人をして襟を正さしめるに十分であつた。かくして選ばれたる十五名の辯士は各自その主張を堂々と論じて、吾々に深き感銘と強き感湧を與へ、いとも盛大にこの大會を終つたのである、日頃練習怠りなきハーモニカバンドの高尙優雅なる幾種かの演奏とともに。

あゝ、わが親愛なる六百の健兒よ、各自、自己の使命を充實し、修養工夫して、高邁なる識見を養ひ、模倣を排して、獨創を尊び他の聲に迷はされず自己の所信を主張して正々堂々、勇往直進して人生の活舞臺に活躍せん根柢を培養し、わが辯論部のいよく益々充實し發展せんことを切望する次第である。

(昭和八・八・二八)

- 一 信 念 馬 場 要 (一甲)
- 二 愛 國 心 中 村 久 夫 (一乙)
- 三 志は高大なるを要す 矢 具 島 魁 男 (二甲)
- 四 裸 一 貫 峰 野 榮 (二甲)
- 五 努 力 安 孫 子 廣 一 (一乙)

- 六 孝道について 許 万 性 (二甲)
- 七 眞劍にすゝめ 中 山 忠 止 (一乙)
- 八 皇道精神と吾人の使命 成 瀬 四 郎 (二甲)
- 九 本分を守れ 堤 正 春 (一乙)
- 十 死するも雖も猶生くるが如く 伊 藤 鉦 一 (二甲)
- 十一 時 の 屑 後 藤 種 一 郎 (一乙)
- 十二 大自然を友とせよ 鈴 木 義 和 (本科)
- 十三 機 會 佐 野 春 雄 (〃)
- 十四 男 氣 矢 野 實 生 (〃)
- 十五 荒木陸相の講演をきゝて 水 野 忠 雄 (〃)

旅 行 部

後藤 鈿 二

- ◇ 休暇前に計畫發表した藝科山高原ハイキングも諸種の事情で中止せればならなかつた事を残念に思つて居ます。來年は是非行かうと考へて居ます。
- ◇ 休暇中生徒有志数名と知多郡河和口海岸へ行きまして三週間過ぎましたが別に特記する事も御座居ませんから書きません。
- ◇ 個人的に舊友鈴木君に七年振りで會つた事は喜ばしい事でした
- ◇ 今秋の計畫：：：秋期休暇を利用して一週間位、参加人員三拾名キャンブサイトとして自分は今秋豊川上流に選定したいと思つて居ます。
- ◇ 御希望の諸君は奮つて申込んで下さい。

(一九三三・八・二三)

工 作 部

古瀬元太郎

本校獨特の存在である、模型電氣機械製作者研究の一機關である我部の本年度における状況は伊藤悠紀夫高等科に残留して健在ますく、進歩の翼を展め、新しく二年に早川、三浦の兩君急速の技術的進歩を認められ、此の三名中心となりて本年末に行はれる第二回展覽會には昨年を凌駕する作品を出品せんものと毎日工作室に製作にいそしんで居る。

いづれその結果は展覽會迄諸君へお預りさして置かう。

尙一般研究部員は昨年よりも多數入部して日々製作して居る。斯道の爲にまことに慶賀祝福すべきである。私は彼等の中より何人か、いつかは、世界的發明者歟見者として名聲を揚げる時期至らんを確信するものである。

映 畫 部

X・Y・Z 生

五月の末にベテリ9分の撮影機を學校が購入したので名畫を鑑賞するのだけじやちと物足らぬと云ふ様な顔をして居る私達シネマ同好者、かく申すX・Y・Zの三名が、シネマ製作研究會と云ふ物々しい會をつくつたのです。そして不完全ながら（是はケンソンであるですぞ）各自思ひ思ひのメイ畫を、即ち驚くじやありませんか？原作・脚色・撮影・はては主演とまで自ら買つて出るのだそうで、（まあなんとエネルギーシユの事です）その作品は實に期待すべきであるが未だにX・Y・Z共作品發表の試寫をしない所を見

るさ中々手をつけて見ると思ふ通りには行かぬらしいです、が、まあ、いづれ、映畫の秋と申します故、此の秋には是非諸君にお目にかけてたいと思つて居ります。

さて、現在迄の作品を記録して置きませう。

◎ 本科生修學旅行記 (百二〇米)

◎ 第三回校内選手權大會 (六〇米)

◎ 七月ニュース (四〇米)

◎ 夏期休暇泗水ニュース (六〇米)

以上

實 驗 室 便 り

谷 川

本年三月に在校生諸氏の御援助の下に廻轉變流機の注文をなし、態々實驗室完備を急ぎましたが未だ製作所で製作上の失敗から、今少し製作が後れるとの事、左様御承知を願ひます。

次に實驗の方も略々講議と並進させ直流機も終り交流機實驗に入りかけてゐます。(以上)

音 樂 部

六月二十九日辯論大會と合して演奏會を行つた。曲目は次の六曲曲目の選擇にはいつもながら困惑する。下品な曲は絶対にやりたくない。浮ついた曲もいやである。四月に手風琴（アコードオン）又はハンドハーモニカとも云ふ）を買つて貰つたが演奏しうるだけの熟達がむつかしいと思つたので今回ば使用しなかつた。

曲 目

- 1 「ヴィアンカドリナベラ」の七つの變奏曲 ヴェーベル作曲
- 2 行進曲「鐵の手を以て」 クレツチユメル作曲
- 3 ソナテイナ モーツアルト作曲
- 4 二重奏「越後獅子」 (長唄)
- 5 ロシアのおどり チヤイコフスキー作曲
- 6 森の鍛冶屋 ミハエリス作曲

部員 第一ハーモニカ 大須賀、河合

第二ハーモニカ 岡田、伊藤、垣見、佐藤、朴

バリトン 山本

コントラ 江崎

閑話數題

和田

去る日老母を見舞ふべく歸郷した。揖斐の清流に釣糸を垂れるのも目的の一つだった。其の日何事か村を擧げての大騒ぎだ、聞けば連日の旱天のための水争ひさの事だ、夜に入るや水門を圍んで兩村民の形勢は益々不穩になつた、警官十數名の出動だ、夜を徹して代表者の折衝だ、鐘は亂打される、焚出しは運ばれる、形勢は益々逼迫した。

その夜明けからあの沛然とした雨だ、昨日まで奪ひ合つた水も今日は過剰に苦しむことになつた。村民達も此の皮肉に定めし苦笑したことだらう。

灼然の或る日鳴海球場に野球試合を觀た。若い選手達が一球の憂

飛ぶ毎に、右に左に快走し然も一團としての、チーム全体の整然とした活動は誠に一つのハーモニーである、殊に將に勝敗を決せんとする最後の一球が投手の手を離れんとする刹那、數萬の觀衆は唯、固唾を飲むばかりだ。凡俗の邪念もなければ、眞夏の暑さも打忘れた様だ。

野球見物も確に一つの鎖夏法だ、然も炎熱へ進出しての積極的な鎖夏法だ云へよう。

この夏、大工道具を購つた、板の切れ端を引張り出してはいたづら仕事を始めた。無器用のため何一つ満足な物は出来なかつたが夢中になつて鋸や鉋を動かして居る間は苦熱も忘れる事が出来た夢中になることも鎖夏法の一つだ。

八月十五日にも盆の供養を營むべく願成寺住職に讀經を依頼した讀經後、印度シヤムの旅行談を聞いた、般若心經の講話も聴くことが出来た、「そしてお經の意味は解らなくても可い、唯靜かに坐して音吐朗々讀め」と言はれた、何しろ近頃愉快な一日だった。

右翼だ、左翼だ世の中は喧しい事だ、然し萬民對等、共働共榮の理想社會は過激な革命によつては出来ない、唯人間各自の内面改造、精神革命によつてのみ實現出来るのではないか。

今日のようなインチキ横行時代に私は不遜にも「馬鹿正直であれ」「正直に徹底せよ」と言ひたい、「眼前の小利を追ふ小才子さなるより寧ろ鈍重でも可いから自知證覺の人さなれ」と言ひたい。

梅村先生のこと 小和田 博

七月三十一日の朝だつたと思ふ。何気なしに新聞を讀んで行くとき梅村清光氏逝去の見出しにぶつかつた。驚いて見直したが確かにさう記されて傍には見覚えある寫眞までのせられてゐる。

八月九日午後二時から千早町建昌寺にて行はれたる告別式に參列する人々は四時近くになつてもなほ絶えなかつた。「惜しい男だつた」——電車を降りて寺へ向ふ途中で見知らぬ紳士の嘆じたる此の言葉は、そのまゝ亦私の咏嘆でなければならぬ。式場で私は無遠慮に懇親者席へ上り込んで了つた。他の人は何と見るか知らぬが私は懇親者のつもりであり、先生も亦私の無遠慮を微笑を以て迎へらるゝものさ信じてゐる。

先生を一年間担任として仰いだ中學五年の頃の思ひ出が新しく甦つて来る。江の島鎌倉東京日光長野の修學旅行にも先生と一緒にだつたのだ。

時々氣焔をあげられるので我々中學生仲間では先生を「山師」と綽名してゐたが、其後着々として其の言を實行して行かれるのを見れば、かゝる失禮な名前の不當な事が分る。資金三十萬圓の高等商業設立の件も明年實現の運びにまで進んでゐた由であり、來べき衆議院議員の選舉にも當選は確實さかられてゐた。併し今や其の人は既に亡い。

維新回天の偉業に見る水戸の熱血を受けた先生は教育者としても新聞記者(教育部)としても又政治家としても常に眞劍味を以て事に當られた。

中商が優勝した第一回の時だつたか、選手凱旋の自動車上から新

聞社前で挨拶された先生の元氣な姿をふと思ひ出したら、今夏の中等野球には是非勝つて來て貰ひたい、勝つて貰はねばならぬと私は他所ながら優勝を念じてゐた。靈前に捧げた優勝旗に先生も喜んで居られただらう。私までが嬉しかつたのだ。自分を知つてくれた人を失ふのは寂しい。今は亡き先生に議論をふつかけて行つた中學時代の自分の姿を思ひ浮べながら筆をおく。感慨無量である。

修學旅行記

第一日 江ノ島鎌倉東京 豊本科 坪田 武

大なる喜びに夢安らかならぬ一行を乗せた列車は、二日黎明江の島驛に着く。整列を終り白砂を踏み進み行くこと數丁、眼前頓に開けて海邊に出づ。長々と續く棧道の盡くる所、遙に青葉萌ゆる江の島見ゆ。朝風の肌寒さを覺えつゝ橋を渡る、富士の高嶺は朝霞に鎖されて姿を現はさんともせず何か心寂し。鳥に着けば兩側に商家ひらけて貝殻細工等を賣る、賣子の聲も懐し。木蔭薄暗き石段を昇りつめたる所邊津の宮あり、辨財天を祭る由なり。之より中津奥津の兩宮を過ぎて行けば島盡きて汀に出ず、折から海全く眠より覺め、友の指さす邊一きは黒く見ゆるは大島ならん、漁船漕を操りつ進む、實に一幅の畫なり。稚兒白菊が絶句殘せし思ひ入江の所はいづこそぞ。一行は道を逆に取り、電車にて長谷に向ふ。極樂寺を過ぐる邊、岬の海に迫る所稻村が崎なるべし。電車を棄て日本一の美男子と聞く露座の大佛長谷觀音をも拜して、

又も鎌倉に向ふ。朱塗の大鳥居をくゞり暫らく行く程に彩色濃かなる八幡宮に到る。かの名高き銀杏は時の流れも知らぬ顔なり参拜を終り廻廊に入れば数々の寶物六百年の歴史を秘め鎌倉時代の文化を語る。鎌倉宮、さくは頼朝の墓所、げに鎌倉は一本一石も歴史の跡ならざるものほなし。午後一時吾等はこの地に名残を惜しみつゝ、東京に向ふ。

横濱も程なく過ぎ、列車は車輪の音も高らかに東京に着く。雄大な建築美は流石に帝都の玄關さうなげたり。大夏高樓櫛比する驛前を宮城に向ひて進む。行く事数丁、一行は二重橋前に整列し、御座所に向ひて最敬禮をなす。目をあぐれば日輪や、西に傾き、仰ぐ皇居の尊嚴身に沁みて覺ゆ。嗚呼吾等幾歳の願ひも叶ひて今、皇居を拜す。幸福なる吾身を思ひ、かたじけなきに涙こぼれて冥目すること暫しなり。

第五日 中禪寺湖畔

矢野實生

東側の窓からさゝら込む朝日の眩しい光に夢を破られて先づ廊下に出て見た。

入江の對岸に茂つてゐる木々の若葉に日の光が映えてパツと四邊が浮立つて見える。

又おひ繁る葉蔭の隙間より暗い地上に幾百條、幾千條の細いほの白い光線が恰も錦の如く織出されてゐる。

湖面を渡つて吹いて來る風もひやりとして、さすがに高地の朝を思はせる。

素適な朝だ、氣持の良い朝だ、じつと耳をそばだてると何處かで鶯の鳴く聲がきこえる。

遠く湖面と山麓との境界は唯滴る様淡綠色にぼけてはつきりしない、朝日にきらめき乍ら汀にひたたくと打寄せる波、その上をゆるやかに走る小舟等總てが夢の様だ。

六時半一せいに起床、昨夜の熟睡で疲れも一掃されて皆は非常に元氣だ。

洗面所に、食事中に、又食後に、一しきり雑談の花が咲いた。

午前八時宿屋の前で點呼をとり、湖を背景として記念寫眞を撮つた、そこで後藤先生より十時迄、約二時間の自由行動を許された二荒神社、中禪寺に参拜する者、湖畔に散歩する者、ボートに乗る者、等々……

海拔八千尺の男体山が屹然と聳え湖を取りまく諸山を見下して斷然王者の觀がある。それを後に前に或は右左に見ながらボートを漕いだあの勇壯な氣分は旅行中最も印象深い一つだったと思ふ。十時再び宿屋前に集合して點呼を取つた。

東京で石山君と分れ今日又村松君が居なくなつた。病の爲に一人淋しく引返して行く友の心情を思ふ時一掬の涙を禁じ得なかつた後藤先生を先登に愈々下山だ、近道して轉んで眼をよこすもの、轉んだ拍子に土産物を投出してしまふ者、斷然トップを切つて喜ぶ者、峡谷の清流を眺めて溜息をつく者等悲喜交々の中に馬返しに着いた。

此處からバス或はタクシーに分乗して日光驛迄ドライブだ。前後左右何時迄見てもあきない景色、誰も彼も素適だ、美しいと感歎詞をもらすものばかりだ。

一時二十分日光驛發車、一路長野に向つた。

車窓より右に淺間、左に妙義の二山を望む頃日は暮れた。

月明りの下を列車は進んで長野驛の構内へ滑り込んだ。驛前にて宿の番頭の出迎へを受け宿屋着と同時に明日の歸名を豫想しつゝ就寢した。

第六日 長野 横山敏夫

我等の旅行もいよいよ今日が最後である。

朝一行は善光寺に參詣する。幾つもの石段を登つて仁王門をくゞるさつき當りが本堂である。一行は宿の人の案内で先づ寶物殿に入り皇族力の御安息所、寶物等を見學する。かくて人皇三十五代皇極天皇二年の草創に我が邦有名古刹なる本堂へ來た。こゝに參詣し終つて堂下にて眞暗な洞穴を四苦八苦して極樂往生を夢想しつゝ有難げにそつとにぎれば……なんと古風な錠一つ。

之より自由行動を許され皆思ひひくに土産を買整へ午前十一時二十四分いよいよ最後の旅路につく。

程なくして有名なる古戰場川中島を望見する。「右に見えますのは武田信玄の陣取つた茶臼山……左に見えますのは上杉謙信の陣取りました妻女山」と車掌の説明に各々うなづいては昔を偲ぶ。

川中島を過ぎて媿捨、冠着トンネル(全長二六五六米)等を過ぎ窓外を展望すれば靈峰日本アルプスは千古の雪を戴き、くつきり空に浮出てゐる。車中の人は傳説を中心に語りつゝ、右に左にと車外の景色を遠望する。御嶽山、寢覺の床と各名所を過ぎて汽車は一路名古屋へ――

車中ではもう最後ださ云ふので皆でそろつて歌を合唱する。

いよいよ午後八時……名古屋着、さて五日間の行程を無事終へてこゝに我々の修學旅行も無事に終りを告げた。

ダムを觀るの記 一甲木下松雄

大井驛より一丘一陵初夏の翠光青嵐を突いて北進一里豁として眼界の開くる處忽ち大井ダムを現す。

河水満溢潭となり湖となり深淵一碧其水流れて水車を動かし直ちに何萬キロの電力を起す噫偉大なる哉水之力噫美なるかな水の精我は其の清冽と豪壯と唯此の二種の感に打れて黙々として歸途に就く。

ダムを觀るの記 一甲横山義郎

水の防壁實に百五拾尺、見よ人智の偉大さを、ゴゴゴたる響を立て、發電機は廻る其所に文明の寵兒は生れ、電氣は發生する、自然は無数の恩恵を我等に興へる中に電氣程人間の幸福の爲めに其の性能を發揮するものは有るまい、流速を檢して出力を考へ、設計を案じて電力を起す、知らず人智は何處まで進むのか、我等の前途は此の人智を百尺竿頭更に一步を進めるに在る、我は此の點に於て此の學校へ入つたことを光榮にも思ひ幸福にも感ずる。

ダムを觀る記 一乙龜山廣雄

滴一滴、涓滴の集積が溪流となり、溪流の集積が木曾川となる、其の木曾川を横断してコンクリートの大堰堤が急傾斜に奔逸して來た本流を堰きを止めたのが大井ダムであつた、私は思はず感嘆じた。人上は、學術は、是れほど豪ら仕事が出来るとか私には思はず感嘆しました。

百數十尺の堰堤に堰き止められた満面の水は天碧に映じて翡翠色

に瑠璃光を放つ深潭となり、一端の開闢より落トして物凄まじく水車々動かし、餘水は溢れて玉漿となり、百尺の水晶簾を堤崖に懸けて白玉の如く日光に輝いて居る、之を白玉樓と謂はうか水晶城と謂はうか、私は始んど形容する語を知りませぬ、私は淺學の爲めまだ水力の偉大を充分に味ふことは出来ませんでした。が堰堤の美觀は百パーセント満喫して歸途に就きました。

ダムを観るの記 一乙川瀬幸夫

惠加の一角蛭川村に雄渾の規模を以て君臨するダムの施設を觀たる時雄大の感を超越して寧ろ崇巖に打たる、程私の心を惹き付けるものがありました。

岩を嘯む激湍、滌々として急角度に奔り落つる木曾の溪流を堰き留めて幾千萬の水壓を爰より一步も通すものか、大手を擡げて衝き立つて居る大壁障、コンクリートの大堰堤の命を奉じて急がず騒がず沈々黙々として深潭を作つて居るダム堰堤の威力と深潭の深度とは思はず感嘆せざるを得ざるものがありました。

人工の進歩、科學の進歩、何んぞ夫れ偉大なるや、私は我が電氣學校を卒業して將來は此のダムを見て暮す身分になりたいと思ひました。

多年教鞭をさられたる兒玉先生は御都合で三月末おやめになつた。無口であまり社交的な方ではなかつたが長上に剛諛せざるどころに僕は好感を持つてゐた。仕事にも眞面目で几帳面なつた。種々取沙汰もあるらしいから空白を利用し一言同君の名譽の爲めに辯じて置きます。(小和田)

第三十九回卒業生卒業記念寄附者芳名(略敬稱)

- 金拾五圓也 加藤大三郎
- 金拾圓也 丹羽 勇
- 金七圓也 水野 泰男
- 金五圓也 五十住 昇、吉川 茂、大島 軍治、淺井 久信
- 野崎 金一、高木 正一、今井 好秀、浪打 盤雄
- 浦澤 清、高木 直巳、鹽見 滿、横井芳太郎
- 金四圓六拾錢也 鈴木清、野呂 肇
- 金四圓二拾錢也 太田九三
- 服部榮三郎、鈴木 梅治、阿部 輝男、林 丈夫
- 鈴木勝三郎、鷺坂 昇、竹内喜佐雄、奥村 貴二
- 伊藤 良一、若山 虎童、稻葉 庄一、彦坂小三郎
- 島田 良二、小出 棟雄、原田 剛三、井上 清司
- 間瀬 銀三、山田 正直、山森 裕、大島 金夫
- 那須 武定、加藤 善春、新川 庄吉、三浦 源
- 河内 靜夫、酒井 鐵夫、山本 安一、牧野 鎌一
- 李 且成、木村 茂、伊藤悠紀夫、三輪 秀一
- 木村 勝美、川上 良松、相馬 一、伊藤 善七
- 藤卷 寅一、高橋 頼光、村瀬 茂吉、福井 良一
- 澤田 寛二、荒川嘉喜吉、鈴木 元彦、柴田 繁孝
- 箕浦 捨夫、高橋 友數、森口 貢、濱淵 濟
- 唐渡 慶司、小川 鑄夫、宮入 正夫、小林 俊男
- 渡邊 義雄、荒木 勝夫、中原 政幸、皆川 春男
- 前川 茂、伊藤 秀吉、井野 金吾、不破 金松
- 渚 辰、伊藤 一夫、西原 勇夫、近藤 輝國

古瀬元太郎、岩田 武夫、山田 喜一、太田 敏夫
 山本 正一、細井 和男、渡邊 好忠、小田高正市
 高野 一之、岩田 政男、下村 十三、伊藤 定男
 杉村 嘉輝、兒島 金七、横江 一夫、内山 義光
 山本 幹男、稻垣 信一、橋爪 露也、大口 盛清
 福田 嘉雄、平田 増雄、黒野 善三
 合計 四百五拾三圓四拾錢也
 右金額は本校五ヶ年計畫の實驗室完成基金に振込みました。有難く御禮申上ます。

昭和八年四月卒業生動靜

(第三九回卒業生百九名中昭和八年八月末現在調査)

伊藤 善七 牧田電機製作所 中區南武平町
 伊藤 定男 旭電氣合名會社
 伊藤 悠紀夫 本校實驗室
 伊藤 良一 愛知縣警察本部電話係
 岩田 政雄 遞信局工務課
 井上 清司 日本毛織人絹工場電氣部 中區岩塚町
 井野 金吾 丸織電氣部
 今井 好秀 木曾川電氣株式會社
 橋爪 露也 三菱電機大會社工場試驗係
 濱淵 濟 自營 岐阜市徵明町
 服部 榮三郎 三菱航空機變電所
 丹羽 勇 合同電氣平瀬變電所
 西原 勇 日本ラヂオ製作所

細井 和男 榮電社
 李 且 成 高丘製作所
 太田 敏男 三菱航空機製作所
 太田 九三 内外綿紡織安城町工場
 大島 軍治 加藤電氣商會
 大口 盛清 東京電燈株式會社
 小田 島正市 東洋紡績尾張工場電氣部
 小川 鑄夫 三菱電機製作所
 奥村 貴二 日本毛織人絹工場變電所
 渡邊 好忠 遞信局工務課市内機械區
 荒山 虎童 高等科學生
 加藤 義春 中部電氣製作所 東區主稅町
 唐 渡慶司 下關工業所
 河内 靜男 日本毛織人絹工場
 川上 良松 精和電氣商會
 横江 一夫 高等科學生
 横井 芳太郎 日本共立工業社
 吉川 茂 三菱電機大會根工場
 高橋 賴光 一宮電氣商會
 高野 一之 杉本ラヂオ商店 一宮市
 竹内 喜佐男 三菱電機製作所大會根工場
 相馬 一 中部電氣製作所
 浪打 盤雄 日本毛織人絹工場變電所
 瀨 辰 中部電力株式會社刈谷營業所
 那須 武定 高丘製作所

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|-----------|---------|--------------|--------|------|-------|-----------|---------|------|-------------|--------|--------|-------|-------|--------------|-------------|------|--------|---------|------------|-------|-------------|----------|--------|
| 宮田金作 | 澤田寛治 | 酒井鐵夫 | 鷺坂昇 | 荒川賀喜吉 | 伊藤一雄 | 淺井久信 | 阿部輝男 | 荒木勝尾 | 安藤孝義 | 近藤輝國 | 兒島金七 | 小川棟雄 | 古瀬六太郎 | 藤卷寅二 | 福田嘉雄 | 福井良一 | 問瀬銀三 | 牧野鎌一 | 山村幹男 | 山田喜市 | 山田正直 | 野崎金一 | 野呂肇 | 浦澤清 |
| 大垣電氣商會 | 極東商會常滑出張所 | 愛知電機製作所 | 三菱電機製作所大曾根工場 | 逓信局工務課 | 全 | 高等科學生 | 東洋製粉會社電氣部 | 旭電氣合名會社 | 死亡 | 川北電機名古屋修理工場 | 山口ラヂオ店 | 逓信局工務課 | 高等科學生 | 陸軍兵器廠 | 曙館トキ一部 南區牛卷町 | 帝國燃絲株式會社電氣部 | 自營 | 逓信局工務課 | 合同電氣津支社 | 共營電氣商會 一宮市 | 小田原鐵道 | 内外紡績株式會社電氣部 | 三菱航空機製作所 | 逓信局工務課 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|--------|----------|--------------|---------------|--------------|-------------|------|-----|---------------|------------|---------|---------------|-------------|-----------|--------|
| 宮入正雄 | 高橋友數 | 杉村嘉輝 | 鈴木勝三郎 | 鈴木梅治 | 鈴木清 | 彦坂小三郎 | 平田増雄 | 鹽見滿 | 林丈夫 | 下村十三 | 柴田繁孝 | 新川庄吉 | 島田良司 | 三浦源 | 箕浦捨男 | 水野泰男 |
| 全 | 現在運動中 | 逓信局工務課 | 三菱航空機製作所 | 三菱電機製作所大曾根工場 | 中部電力株式會社(岡崎市) | 豐田紡績菊井町工場電氣部 | 日本毛織株式會社變電所 | 高見商會 | 高等科 | 内外綿紡績株式會社安城工場 | 東光商會名古屋出張所 | 日本大學夜學部 | 沖電氣株式會社名古屋出張所 | 服部紡績株式會社電氣部 | 三菱電機大曾根工場 | 逓信局工務課 |

以上八拾名

以上今日迄に私の所迄來て居る諸君の動靜は右記の通りです。此の他就職せざりし人、又は既に就職すれど當方通知モレの諸君は早速御通知願います。

本校佐野作一先生は最近銓衡によつて逓信省電氣事業主任技術者第一種の資格を認定されました。



同窓會 欄

編輯主任
江本巴

諸君へのお願い 後藤生

本年の四月、春期總會に、御出席の皆様は、僭越ながら、是より、小生、大に、會の進展向上の爲努力致しますと、大に述べて、一役買つて出ましたが、その後、遂に怠けてしまひまして、此の報を出す迄何も爲さず、無爲に過したのを深くお詫び致します。

がしかし、そろ／＼同窓會としても活躍しなければならぬ、良い時候に相成りましたから、早速本九月末休暇を利用して第一の仕事會員名簿を作成する事に決定しました故、何卒、御存知御同窓の諸君にして未だその後の住所、職業、勤務先等變更御通知に相成らない諸兄に御話願つて是非通知下さる様おすゝめ願ひます、併せて、本年度分會費を至急收められる様おすゝめ願ひます。

同窓會刷新委員會

昭和八年度三月十二日午後七時より母校に開催。當日の出席者は

- | | | | |
|--------|-------|-------|-------|
| 井戸 奎三 | 田口 四郎 | 大脇 保 | 毛利 恭道 |
| 五十嵐眞一郎 | 宮島 鉦一 | 長 甚之丞 | 鷺坂 昇 |
| 奥村 貴一 | 大島 茂樹 | 高見 滋 | 伊藤悠紀夫 |
| 若山 虎童 | 横江 一夫 | 谷川 先生 | 江本 巴 |
| 後藤 先生 | | | |

而して従來校主後藤鉦二先生と同窓會との關係が實際には絶大の御援助を受けながら會則上無縁なるため之を甚だ遺憾とし

後藤先生を副會長並に理事長に推戴する事に満場一致可決、後藤先生の御賛同を得。

其他會則變更に關する種々の討議を行ひ十一時過散會。

荻野先生常任理事辭任

多年母校に勤務され、同窓會常任理事として會務に盡瘁されし荻野正次先生は不幸本年初頭病を得られ病床に絶對安靜を要する身となられし爲遂に母校及同窓會理事を辭任された。目下郷里御油にあつて鋭意加療中である。吾等は同氏の御全快の一日も早からんことを切に祈るものである。

會費拂込を乞ふ

本號より會費拂込會員にのみ發送することゝした。殊に今年末には名簿發行の豫定であるが、之も會費未納者には送らない事になつた。依つて會員諸君八年度分として金壹圓也直ちに拂込め。本會の振替口座は名古屋六五六五番である。

會 員 動 靜 [敬稱略]

13 森 高由 東邦電力名古屋支店常務散宿所に轉勤
住所は知多郡大野町字下砂子
南區本星崎町新田二二二九

33 大橋 喜作 名古屋遞信局工務課

35 布目 豊秋 東區大曾根町南一丁目九古川直三郎方

37 仲村 正 加藤商會岐阜出張所
岐阜市眞砂町五ノ五

30 早苗 英二 加藤電氣商會名古屋支店

35 野田 弘 豐橋市南榮町東山四五ノ一七

34 藤田 正義 四日市市鹽濱町馳出
東洋毛糸紡績株式會社電氣部

33 長瀬 長年 市外萩野村名古屋紡績工業組合矢田川工場

16 米倉 健一 台灣嘉義郡水上床南靖五明治製糖社宅

37 江口 卯 豐田式織機株式會社新川工場在勤
住所は中區養老町二ノ一安井鐵次郎方

37 宮地 信乃 帝國捲糸變電室在勤、住所は西區田幡町若園

37 南浦 正 帝國捲糸變電室

37 大島 茂樹 名古屋遞信局無線電信試驗庄内分室在勤
住所は西區押切町三ノ六福田銀次郎方

36 山内 義雄 京都市左京區聖護院圓頓美町二鈴木六三郎方

37 山上 進 株式會社松本啓藏商店倉庫内ケーブル係在勤
住所は東京市大森區新井宿四ノ一一一八江藤
徹方

37 花井 章 市外庄内町名古屋電話試驗庄内分室在勤

12 長谷川廣太郎 岐阜縣益田郡小坂町

12 小野 光 長野縣西筑摩郡大桑村野尻大同電力大桑發電
所

33 石原 信雄 一宮市仲之町一九野田繁太郎方

20 宮下 米三 中華民國山東省青島市外四方庄青島大康所廠

27 堀尾 秋帆 大阪市北花區四ノ島千鳥町八

21 内田 可成 東區船附町一市水道部船附唧筒新公舍

33 井上誠四郎 濱松高射砲第一聯隊照空隊四班

37 櫻井 忠二 加藤電機試驗部、東區千種町赤萩二ノ二〇

29 橫山 員治 中部電機製作所。住所は東區水筒先町二ノ一

33 戶田 正胤 縣下知多郡東浦村大字石濱字前濱四六戶田市
五郎方

37 柴田 義雄 東邦電力東部營業所工務係

23 戶田 五城 朝鮮長興電氣株式會社在勤
住所は朝鮮全羅南道町興郡長興面岐陽里九二

20 西 助次郎 大阪市西院川區浦江上二丁目大日本紡福島工
場社宅

23 今枝 昇三 大垣驛構内鐵道省變電所在勤
住所は一宮市殿町二ノ二十二

15 田中 荒喜 四日市々濱田二一七合同電氣四日市變電所社
宅

25 稻垣 繁一 日本電力水津川變電所在勤。住所は大阪市大
正區南恩加島町二ノ八原田美津方

11 千島 廉平 大連市龍田町一四一

- 1 末松七之輔
- 29 加藤 志造
- 29 内木 幸吉
- 30 柴田 鏡造
- 20 栗林 久
- 15 小出 三治
- 8 三田 晃
- 37 早野 正義
- 37 服部 繁雄
- 39 瀬谷 正男
- 37 山中 武彌
- 38 松下 修造
- 11 小倉直太郎
- 野田 銚次郎
- 24 鈴木 與幸
- 30 卜部 一郎
- 18 田口 博
- 35 鈴木 繁正
- 31 野寺 恒雄

岐阜縣多治見市中部電力株式會社
多治見營業所勤務

京都市下京區西七條市部町六ノ二

岐阜縣加茂郡西白川村白山東邦電力七宗發電
所

名古屋鐵道局名古屋電力區へ轉勤

大阪市日本セルロイド工場

享榮商業學校生徒

名古屋中央放送局津出張所

名古屋遞信局工務課
住所は東區千種町車田二一四

名古屋醫師協會レントゲン部

岡谷郵便局

朝鮮窒素肥料株式會社

大同電力大阪支店へ轉勤
住所大阪府北河内郡三郷村大字高瀬大枝四七

廣島電氣株式會社福島變電所
住所は廣島縣福山市沖野上町六丁目

岐阜縣惠那郡加子母村加子母川發電所舍宅

昭和毛糸紡績會社一宮工場電氣科變電所係
一宮市外宮山町一〇三五

各務ヶ原飛行第一聯隊第三中隊第一班
自宅は大垣市東久瀬川町野寺接骨院

- 23 川口 章
- 33 松原 一雄
- 25 永田 唱吉
- 25 橫地 忠
- 24 田中 重雄

計報

左記諸氏病魔の侵す處となり長逝さる。眞に哀悼の到りに堪へず
謹みて弔意を表す。

- 39 安藤 孝義 昭和八年三月病歿
- 37 筒井 保 昭和七年五月病歿
- 37 稻垣 茂雄 昭和七年四月病歿
- 33 吉田 實 昭和七年一月廿五日病歿
- 33 木全 慎一 昭和八年四月十二日病歿
- 38 中島 清海 昭和八年六月病歿
- 26 三宅 賢三 昭和八年七月病歿

會費領收

〔敬稱略〕

昭和八年度分

- 櫻井 忠二
- 坂野 寅吉
- 加納 重郎
- 内田 可成

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|-------|-------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|------|-------|------|------|-------|-------|------|------|-------|------|------|-------|
| 高野一元 | 高木正一 | 橫井芳太郎 | 加藤義春 | 奥村貴二 | 大島軍治 | 李且成 | 丹羽勇 | 橋爪谿也 | 今井好彦 | 井上清司 | 伊藤一夫 | 伊藤定夫 | 稻垣繁一 | 末松七之輔 | 林英美 | 柳原秀雄 | 大島茂樹 | 戸田五城 | 加藤長松 | 矢野武男 | 布日豊秋 | 伊達次郎 | 戸田正胤 | 大橋喜作 |
| 相馬一 | 高木直己 | 橫江一夫 | 加藤大三郎 | 渡邊好忠 | 大口盛清 | 太田敏男 | 西原勇夫 | 原田剛三 | 五十住昇 | 井野金吾 | 岩田武雄 | 伊藤善七 | 今枝昇三 | 加藤志造 | 藤田正義 | 横山員治 | 長谷川精二 | 吉本巳三郎 | 大井史一 | 西尾正三 | 近藤良平 | 新田忠夫 | 井戸李三 | 藤野九一 |
| 那須武定 | 高橋頼光 | 吉川茂 | 川上良松 | 渡邊義雄 | 小川鑄夫 | 太田九三 | 細井和男 | 濱淵濟 | 林丈夫 | 稻葉庄一 | 岩田政雄 | 伊藤良一 | 田中荒喜 | 内木幸吉 | 小山三治 | 仲村正 | 杉本常義 | 二村利和 | 伊藤松雄 | 外山次郎 | 溝口圭二 | 小林新一 | 高見滋 | 永田榮太郎 |
| 中原幸政 | 高橋友數 | 竹内喜佐夫 | 河内靜男 | 若山虎童 | 小田島正市 | 大島金夫 | 唐渡慶司 | 服部榮三郎 | 林憲一 | 稻垣信一 | 岩澤守 | 伊藤秀由 | 千島廉平 | 柴田鏡造 | 栗林久 | 南浦正 | 尾關常二 | 瀬谷正雄 | 山上進 | 稻垣信一 | 安田鑛太郎 | 下谷博 | 堀場芳郎 | 柴田義雄 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|------|------|------|-------|------|------|-------|------|------|------|------|-------|-------|-------|------|------|
| 浪打繁雄 | 内山義光 | 山本安一 | 山村幹男 | 前川茂 | 福田嘉雄 | 近藤輝國 | 阿部輝男 | 鷺坂昇 | 木村茂 | 宮田金作 | 箕浦捨男 | 柴田繁孝 | 彦坂小三郎 | 鈴木清 | 卜部一郎 | 戸田正胤 |
| 渚辰 | 野呂肇 | 山本正一 | 山森裕 | 藤卷寅二 | 福井良一 | 兒島金七 | 荒木勝尾 | 澤田寛治 | 三輪秀一 | 宮入正夫 | 島田良次 | 鹽見滿 | 森口貢 | 鈴木梅治 | | |
| 村瀬甚吉 | 野崎金一 | 山田政直 | 牧野鎌一 | 古瀬元太郎 | 小出棟雄 | 安藤孝義 | 荒川賀喜吉 | 佐藤垣 | 三輪良夫 | 皆川春男 | 新川庄吉 | 平田増雄 | 松江英二 | 鈴木勝三郎 | | |
| 浦澤滿 | 黒野善三 | 山田喜市 | 間瀬銀三 | 不破金松 | 小林俊男 | 淺井久信 | 酒井鐵夫 | 木村勝美 | 三浦源 | 水野泰男 | 下村十三 | 平野悠紀夫 | 松村嘉輝 | 鈴木元彦 | | |

昭和八年度遞信省電氣事業主任
技術者資格檢定第三種第二次試驗問題

測定

(一) 一〇〇V、一〇Aの單相交流積算電力計を定格電壓、定格電流及力率〇・五にて試験したるに圓板の回轉數二〇に對し五七

秒を要したりと云ふ。此場合に於ける誤差幾パーセントなりや。但し計器係数は $1K \cdot W \cdot H \parallel 24000$ 回転なりとす。

(二) 三相不平衡回路の各線に接続せられたる電流計の指示が夫々 a 相 $30A$ 、b 相 $40A$ 、c 相 $50A$ なるとき、a 相電流と b 相電流との相差角幾何なるか

(三) 一定電圧の電源に内部抵抗未知なる電圧計を直接接続したるに指示 V_1 ヴォルトを得たり。次に既知抵抗 R オームを電圧計と直列となして同一電源に接続したるに指示 V_2 ヴォルトを得たりと云ふ。此の電圧計の内部抵抗幾何なるか。

(四) 下記抵抗の測定をなすに適當なる測定器の名稱を擧げよ。

イ、屋内電灯様の絶縁抵抗

ロ、地線工事の地板抵抗

ハ、太き裸銅線(長さ約一米)の抵抗

機 械

(一) 直流分捲電動機と誘導電動機との類似点を擧げ之を説明せよ。

(二) 同期電動機の磁極面に沿ひて設くる制動捲線の効用を述べよ。

(三) 變壓比 $10:1$ なる相等しき三個の單相變壓器あり。一次星型二次三角形に接続し三相變壓を行ふものとす。今二次に端子電壓 $200V$ ヴォルトの平衡負荷 $75KVVA$ をかけたるとき各變壓器の一次捲線及二次捲線に通ずる電流及一次線間電壓幾何なるか但變壓器の勵磁電流及イムピーダンスは之を無視するものとす

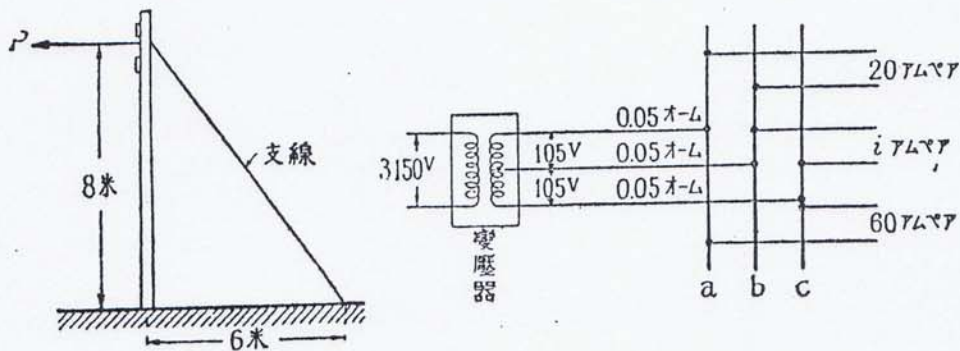
配 電

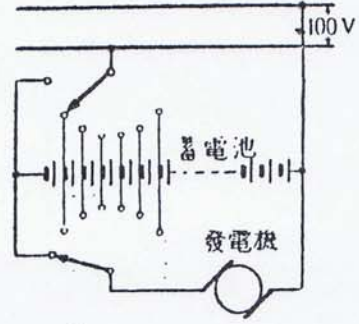
(一) 圖の如き單相三線式配電線路あり。電線一條の抵抗 0.05 オーム、變壓器の一次電壓 $3150V$ 、二次電壓 $210V$ 及 $105V$ なり。今 ab 間に $20A$ 、 bc 間に iA 、 ca 間に $60A$ の無誘導負荷を加へたるとき ab 間の電壓 $102V$ なりしと云ふ bc 間の負荷電流 i 變壓器一次側電流及 bc 間の電壓を求む。

但變壓器のイムピーダンス勵磁電流及線路のリアクタンスは之を無視するものとす。

(二) 圖の如く支線を施設して電柱に加はる水平張力 P を支へんとす。支線として四耗の鐵線七條を用ふるとき之により支へ得る水平張力 P は何疋なるか。

但四耗の鐵線一條の破壊張力は 4400 疋とし支線強度の安全率は 3 とす。





(三) 圖の如く端電池開閉器 (End cell switch) を使用して 100V の電燈に供給する鉛蓄電池に就き次の事項を答へよ。

- イ、電池の總個數
- ロ、端電池の個數

(四) 次の事項に就き簡単に説明せよ。

- イ 鐵裝電纜
- ロ 金屬線樋工事
- ハ 直流加減壓機
- ニ 架空共同地線
- ホ 弧光地絡 (Arcing ground)

電 燈

- (一) 幅員二四米の街路に二〇米間隔を以て千鳥式に燈柱を配置し、街路上の平均照度を五ルクスならしめんとす。各燈柱上に幾ワットの電球を必要とするや。但し街路面に於ける光束利用率は二五%とす。
- (二) 二〇〇立の風呂桶に満水せる水を二時間にて攝氏四〇度に温めんとす、之に要する投込型電熱器の容量を定めよ。但し水温は攝氏二十度とし且本装置の能率は八十%なりとす。
- (三) 下記のものにつき略述せよ。

- イ 器具能率
- ロ 溢光能率
- ハ 恒溫器 (Thermostat)
- ニ 抵抗熔接
- ホ ランベルト
- ヘ 眩輝
- ト 溢光照明
- チ 電氣レンヂ

發 電

- (一) 二個の發電所を新に送電路線により連絡せんとする場合は兩電源の相廻轉を檢定する方法及其相反する場合之を一致せしむる方法を述べよ。
- (二) 出力一〇〇〇KWの凝汽式タービン發電機一組を有する發電所あり、其全負荷運轉に於て利用せらるゝ電力量及主要なる損失(發生場所毎に區別する事)の概數を汽罐に供給せらるゝ石炭の熱量の百分率にて示せ。
- (三) 水力發電所の取入口より放水口までの各所に於て水を制御する爲めに施設せらるゝ設備の主なるものゝ名稱及位置を述べ且其利用を説明せよ。

昭和八年九月十六日印刷
 編輯人 小和田三郎
 印刷人 渡邊榮三郎
 名古屋市中區南伊勢町二